

日展ニュース

No. 183

<https://www.nitten.or.jp/> 令和5年2月10日発行

編集兼発行人 神戸峰男



特集 第9回日展



第九回日展を終えて

公益社団法人 日展

理事長 宮 田 亮 平

日展は明治四〇年の文展（文部省美術展覧会）から数え本年度一一五年の大きな節目となりました。この間を振り返れば、明治維新のもと政治、経済等が急速に発展する中で、文化の一翼を担うべくスタートしたのが文展であり、その後、帝展そして日展となって現在に至るまで、諸先生方の並々ならぬご努力のもとで、常に文化芸術の力によって多くの方々と「心の安らぎ」や「勇気」、「ときめき」等々を共有すると共に、数々の偉大な功績を築かれた芸術家を輩出してまいりました。

コロナ禍の収束が見えぬ中においても、途切れることのなき継続はまさしく美学そのものであると感じ、感染対策を徹底した上で第九回日展を開催、盛況のうちに終えることが出来ました。ご高覧いただきました皆様には心より御礼申し上げます。

引き続き、巡回展を開催いたしておりますので、何卒ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第二〇二二年 日展受賞者一覧

大臣賞

日本画 文部科学大臣賞 緑韻に白く
洋画 文部科学大臣賞 瀬 音
彫刻 内閣総理大臣賞 無垢の予兆
工芸美術 内閣総理大臣賞 神々の座「天叢雲」
書 内閣総理大臣賞 元好問 詩句

東京都知事賞

日本画 東京都知事賞 雨ニモ・・・
洋画 東京都知事賞 時を超えて
彫刻 東京都知事賞 ヤマトオクナ御子
工芸美術 東京都知事賞 威一追憶の抄
書 東京都知事賞 風 憐 目

日展会員賞

日本画 日展会員賞 愁
洋画 日展会員賞 語 ら い
彫刻 日展会員賞 天平の月を想ふⅢ
工芸美術 日展会員賞 瀧・ジュラシックリ
書 日展会員賞 茶湯古事談

特選

第一科《日本画》

震 生 震 今 石
れ れ 生 村 崎
共 共 共 飼 市
に 泳 泳 義 良
泳 ぐ 太 丈
。 生 。

刻 廻 代 城 大 鵜 今 石
白 い 時 野 西 飼 村 崎
廻 廻 奈 健 義 市 誠
る 代 英 太 丈 良 和

行 林 田 中 達 也
赫 き 渦 方 潘 本 星 道 真
赫 赫 赫 赫 赫 赫 赫 赫
ア ク ア の 主 吉 福 川 咲 江

第二科《洋画》

白 昼 の 階 段
こ れ か ら ……
Get Running!
冬 の 海
命 海 想 脈
騎 士 達 へ の い ざ な い
生 人 形 っ か い '22
天 下 晴 れ て

飯 塚 康 弘
住 井 ま す み
関 野 智 子
高 田 啓 介
竹 内 隆 恵
永 谷 光 敦
中 西 弘 幸
橋 本 弘 幸
樋 口 文 子
吉 成 浩 昭

第三科《彫刻》

池 端 英 次
岩 谷 誠 久
酒 井 華

第四科《工芸美術》

三 夏 の 湖
歩 を 進 め て
流 れ 露
夢 み る 人
宮 地 江 智 尚
志 萱 州 典 朗

砂 海 の 風
遙 跡 小 喜 多 浩 介
始 ま り の 景 齊 藤 晴 之 也
オ ー ジ ュ 勝 利 の 女 神 ニ テ
花 の 雫 桜 田 知 文
愛 燦 燦 高 森 絢 子
steel yard 手 銭 吾 郎
燃 ターコイズの風 堀 堀 外 村 菱 彦
宙 へ 堀 内 晴 美

第五科《書》

山 襷 の 影
風 襷 の 影
呉 偉 業 詩
屈 大 均 詩 句
蘇 東 坡 詩
鎌 倉 殿 の 和 歌
先 徳 輜 光
藤 浪 光
徳 器 浪 光
一 木 桜
赤 澤 寧 生
足 立 光 嶽
尾 崎 之 揚
北 山 千 石
小 林 千 早
中 室 舟 水
奈 良 衡 齋
西 田 健
萩 野 展 雲
牧 野 聖 雲

座談会

「混迷の中で―日展への期待―」

出席者

理事長 宮田 亮平

副理事長 事務局長 神戸 峰男

副理事長 第一科 日本画 審査主任 土屋 禮一

副理事長 第二科 洋画 審査主任 佐藤 哲

第三科 彫刻 審査主任 山田 朝彦

第四科 工芸美術 審査主任 春山 文典

第五科 書画 審査主任 星 弘道

司会 西村 東軒
(日展ニュース委員)

令和4年11月18日(金)
於 国立新美術館 地下一階

審査室D



司会 それではまず、理事長の宮田先生から、ご挨拶と今回の審査について、お話をお願いいたします。

審査全般について

宮田理事長 お忙しい中、お集まりくださいます、ありがとうございます。ございます。

昨日、晴れの授賞式を挙行することができました。私、理事長としては初めてでございましたが、大変厳粛で、かつ非常に和やかで、とても素敵な授賞式であったなと感じております。と同時に、日展というのは何とすごいところだと改めて一会員として尊敬をいたしました。それはとりもなおさず、

一一五回の歴史、先輩諸氏の先生方が築き上げてくれた世界観を継承すると同時に、より改革をしながら、もっともつと時代に合わせ、日本の文化の一翼を担っているという確信を持った日展ありきになっていけたら幸いかと思っております。

私も審査・鑑査の際に各科を全て回らせてもらいましたけれども、大変厳粛であり、かつ厳しく、とても気持ちのいい審査をしてくださっていたように感じる次第でござ

宮田 亮平



ございます。審査員の皆さんは、芸術家であり、作家であり、その苦労を知っているからこそできる、すばらしい審査であり、それを経た作品が現在一堂に並べられ、かつここに受賞者の皆さんが輝いているという感じがし、大変うれしく思う次第でございます。

司会 続きまして、副理事長の神戸先生から、事務局長というお立場で、お話をよろしくお願いいたします。

神戸事務局長 搬入から審査終了までということですが、私自身、今年、三科の彫刻の審査にも携わりました。審査の進行は山田審査主任にお願いすることで、割に全体を拝見するのにはいい位置取りでした。ほかの科の先生方からも、各科のいろいろな情報を得ることができ、今年は今までに増し

ていい審査状況であったという報告を受けました。

改組新日展としての第一回から、回を重ねて九回を迎えることができました。さらに宮田新理事長のもとよい審査ができ、いい形で開会を迎えられたなと思います。

出品点数は、去年よりちょっと減ったくらいでしたけれども、入場者は、今の状態ですと大体一割増。入場者が増えるということは、こんなうれしいことはございません。



都倉文化庁長官来館

司会 入場者数が増えるという、明るい兆しが見えてきたとのこと、ありがとうございましたので、心強く思いました。

それでは、各科の審査主任の先生から、今回の審査の方針、審査状況、作品の傾向、また今後に向けてどういう作品が望まれるか等のお話をいただきたいと思います。それでは、一科の土屋先生からお願いたします。

土屋 今、宮田理事長のお話にもありましたけれども、ここへお邪魔するのに、会場を一周してまいりました。一階から二階、三階とエスカレーターを上がりながら、多くの方が売店で絵葉書などを買っておられたり、チケットを求めて入ってこられるのを見て、ああ、日展というのは先輩たちのおかげで、この大きな展覧会が繋がってきているのだなと思ひ感じ入るところ多くここで何を話そうかと、引き締まる思いでやってまいりました。

ご存じのように、日本画には多くの団体がありますが、伝統をとにかく守るのだという団体もありますし、逆に伝統におもねることなく、世界性に立脚して、日本画を新たに改革しようという団体もあります。そういう意味では、

我々日展の日本画は、伝統からも自由でありたいし、新しいことをやらなきゃいけないという強迫観念からも自由でありたい。「自由」というのはおのずかに由ると書きますけれども、日展の日本画らしい、作家一人一人のこだわりを大切に、今年は比較的幅広く選べたような気がしております。

昭和三十三年の社団法人日展設立趣意書の中に、「展覧会の志すところは、奇矯に偏らず、陳腐に陥らず、清新にして健康なる国民芸術の進展にある」という一文があります。時折見直し、読み返し、忘れないでいたいものです。

外部の審査員も含めて、一九名の審査員お一人お一人の意見を大切にしながら、特選が決まるまできめ細かく進行できたと思っています。



土屋 禮一

結果的に、日本画の特選は、三〇代から七〇代までの幅広い年代の方々が選ばれました。それから初入選が一三点ありました。その内一一点が二〇代、三〇代の方でした。

審査には、「今日は未来を決める日だ」というような気持ちで、当たらせていただきました。

今回とてもよかったと思うのは、審査が終わった後、特に初めての審査員の方が何人かいましたので、一人ずつどう思ったかという意見交換会をやりました。

私たちはこういう審査を通してずっと選ばれてこまで来られたのだなというような感動的な話の中で、審査員の中からは、「日展のこれから考えた時に、票だけで選ぶことが正しいのでしょうか」というようなことも出てまいりました。

そういうことを言い出してくれる審査員を何人か選べたことにちよつと感動的というか、感じるものがありました。

司会 続きまして、二科の佐藤先生、お願いいたします。

佐藤 審査に当たりまして、最初に審査員にお願いしたことは、いい作品を落とさない、これを最初に強く言って、それを審査員が

佐藤 哲



守ってくれました。

洋画は数が多いものですから、非常に難しい面もありますけれども、要するに、よい作品だったら入る、ということで審査員みんな協力してくれました。

そして、このコロナの時期に応募してくださった熱意、これをぜひ汲んで、できるだけ大勢の方を入れようという思いで始めましたが、日展のレベルが落ちてはまずいということで、非常に厳正にいたしました。それで今回、いい作品がそろったのではないかと胸を張って言えると思います。

司会 それでは、三科の山田先生、お願いいたします。

山田 今年は昨年と同じぐらいの搬入数でありました。会場も大きくなくなってはいるわけではないので、点数を絞り込むということにそれ

ほど苦労はありませんでした。彫刻の会員の場合、昨年までは半数が大きな作品、半数が小さな作品と一年ごとに変わる作品の寸法制限がありました。が、会場の効果というものを考えた時に、この制限を撤廃したほうがいいのではないかとということを感じました。他の理事の先生方と話し合いをして、今年からその制限を撤廃しました。大変にそれが功を奏したというか、伸び伸びとした作品がたくさん出品されたような気がします。

もう一つは、特に彫刻というのは、時間もかかるし、お金もかかるし、場所も必要なので、出品者が減ってきておりますが、そのような中でも一一名の新入選がありました。その中に、初出品で初入選、そして特選を取った、しかも二一歳、結果的にはそういうことは後からわかったのですが、そういう若者が生まれたということは、我々三科としては非常に希望が持てるというか、うれしいニュースでありました。

今年、私が審査主任を務めました。が、公明正大を徹底しまして、オープンに、鑑査・審査を行いました。その結果が、今回の展示になったということでございますので、これからどういう評価が出る

彫刻会場



のか、楽しみにしております。

司会 続きまして、四科、春山先生、お願いいたします。

春山 コロナ禍が続く中で、今年は昨年とほぼ同数の搬入数があり、大体この辺が現状では妥当な数字なのかなと思っております。

その中で、今年ちょっと変化があるなと思ったのは、工芸は立体作品と、平面体作品があります。が、大体二対一ぐらいの割合で立体のほうが例年多いのですが今年はまだ特にそれが顕著になりました。平面作品が減っているのは、

ちよつと気がかりです。

そのような中で審査に当たったわけですが、本年の内部の審査員は一七名中七人が新審査員でした。非常にフレッシュな審査員が多いことは、それはうれしかったですね。

ですが、少々心配な点がありましたので、まず審査に当たる前に、一一五年続く日展の伝統と歴史についてちよつと触れさせてもらいました。

皆さんは決して一番や二番を決めるコンクルールの審査員に選ばれたわけではないのだから、日展の歴史の中で、その辺、本当に理解して審査に当たってください。落とす審査ではなくて、いいところを見つけて、言葉を言いかえれば、新しい人をとにかく発掘していこうよ、ということ徹底しました。外部審査員の先生、新人の審査員にも理解していただいて、非常に協力的に審査を行うことができました。

それから、会場構成、レイアウトというのは非常に大きな問題なので、一度前年度の会場構成を見て、反省すべきところは変えていこうということで、実施いたしました。この答えは、最終日まで待つて、鑑賞者や出品者からどのよう

な答えが戻ってくるかがまた楽しみといいますが、来年に向かつて一つの展望になるのではないかなということを思っております。

司会 それでは、五科の星先生、お願いいたします。

星 今年は八五七六点という公募点数、去年からすると、五八八プラスという出品状況でありました。ただ、とにかく陳列の制限がありますので、一〇八九点まで絞り込まなくてはならない。

五科の基本方針として、各書体に対し長い経験による審査員の審美眼を信頼し、全員の意見が反映するような形で、いい作品を見落とさないということで審査させていただきました。

この最後の絞り込みというのがとにかく大変で、結審は投票になりました。



星 弘道

結果的に、投票がいいかどうかということはあるかもわかりませんが、私が見る限りでは、非常に的を射た結果になったと自負しております。

私、改組新第一回目の書の係主任を務めまして、その時は、どのように書の審査を進めていったらいいのか、本当に大変なことでしたけれども、あれから九年を経て審査のあり方が大変練れてきたような感じがいたしました。この方向で積み重ねていけば、よりよい審査ができるのではと思っております。

司会 先生方のお話をお聞きして、審査においても、次の後半のテーマにつながるような、何か明るい兆しを感じました。

何か補足があれば、また順次お聞きしたいと思います。

土屋先生、いかがでしょう。

土屋 さっき洋画や書はなかなか絞り込みが大変だとおっしゃっていたね、数が多いから。ただ、方法として何かそういうことも全体で考えていかなければいけないことなのかもしれないですね。

司会 それでは、二科の佐藤先生、お願いいたします。

佐藤 研究会という言葉を使うのはいけないかもしれないけれど

も、日々の勉強会をやらないと、どうも作品が伸びない。

それで、私事ですが、私の参加する会では、審査員の決まる前の早い時期に勉強会を行いました。

ただ、コロナのことがありまして、地方の人などは全然出られないわけですよ。

何らかの方法でやらないと、質の低下で大変なことになると思います。

司会 それでは、三科の山田先生、お願いいたします。

山田 鑑審査に当たりましては、一点一点、三六〇度の角度からチェックをして採決するわけです。

ほかの科と違って、ぐるっと見回すことによって、我々は大体のこととは見当がつかますので。

ただ、審査を続けて、造形的には優れているのに色が悪いということでは保留にした中にも、これは残していいのではないだろうかとか、合意のもと再考する作品がありました。

私の今回の考え方は、審査員が一九人いますから、過半数をもって認めるということを基本にしました。全員でもう一度保留について見直して、結果三点が入選ということになりました。

こういうことも、杓子定規にこ

れで終わりだということではなくて、若い人が一生懸命やってきたものを見直すというか、少し力を貸して、将来の日展のために、また頑張ってもらえるようなものに続けられたらいいなと思って、審査をしました。

土屋 今の点ですが、今回、彫刻を見せてもらいながら、色がきれいだなと思ったのが何点かありました。ただ、先生方からすれば、色もその一部だと思いますが、やはり色と形という意味では、どうですか。一緒ですよ。



築文部科学副大臣来館



山田 やはり基本は、一緒ですが、最終的には形ですね。彫像の場合には、地球上に立っているわけですから、この立つということがいかに自然に造形されているかということ、これは基本中の基本だと思って、そんなようなことをチェックしながら審査するわけです。

先生の今のお話の色、これも大事な要素ですが基本的には造形、構力だと思っています。

司会 それでは、四科の春山先生から、何かつけ加えることがありましたらお願いいたします。

春山 票という判断は、私、非常に懐疑的で。例えば一票の差で入選か落選かというのは、当然出てくるわけです。スポーツでしたら、一点というのは決定的な一なのです。

立体作品の場合ひな壇上に一五、六点並べて審査員がさまざまな角度から見っていくのですが、中央に置かれたものと端のほうでは見え方が違ってくる場合もあります。

ですから、票数は、判断の基準にはなりますが、それで最終的に決めてしまっているのかというと、どこかで結論を出さなければいけないわけです。今回の審査に当たっては、票数だけではいけないということで、外部審査の先生方を含め審査員全員の意見を聞きながら、皆さんで話し合っ、ここまでのレベルであれば許容範囲ではないかと、そういうことをしてきましたが、芸術作品の評価を一人の異なった個性の審査員が見て判断することは、考えれば考えるほど難しい問題だなということを感じました。

司会 かなり難しい問題になりましたが、五科の星先生、お願いいたします。

星 今回、一九三点の初入選が出ました。初入選を発掘できたというのは、結構審査員としてはうれしいことでしたが、ベテランの人たちの作品が、結構甘くなってきたいました。日展というのは会友になったからといって落ちないわけではないのですが、そのぐら

いになるとだんだん、入って当たり前だという自己本位な作品が目立ったような気がして、これからの書のあり方というか、そういうものを教えてもらったような気がしました。

司会 今、一科から五科までの先生方のお話をお聞きになって、宮田先生、何か感じられたことはございますでしょうか。

日展会場で森林浴

宮田理事長 各科の先生方の苦労というものが如実にあらわれているような気がしました。それと同時に、先ほど土屋先生や春山先生がおっしゃったように、数の論理というものが芸術の論理と一致するかどうかというところ、これは永遠の課題かとは思いますが、やはり常に議論し合うということがとても大事で、その中から選ばれた結論、それは今年の結論であり、来年の結論がまた少し色が変わっても、私はそれが生きている芸術であるという気がします。

日展のすばらしいところというのは、審査の先生方が毎年変わるということ、そこに固定概念だとか、通年のないいわゆる弊害がなくなってきました。



佐藤先生のたった一言、いいものだというものを選んだという、その哲学的にも論理がしっかりしているということ、これもすごく大事なことであり、同時に星先生の、膨大な数の中から瞬時に選ぶということに対しての眼力というのですか、そういうものに対してのすばらしさ、やはり審査員としてのプライドというものがしっかりとあらわれているような気がして、とてもいい感じがしましたね。それから、山田先生が彫刻においては、数は少し減ったというお

二部制にし、出席者の人数を制限しての授賞式



話をしていますが、日展の彫刻というのは王道だと私は思っています。美というものの中に人体がある。これは紀元前からの流れでございまして、その王道をしつかりとつかんでいるという点で、ぶれのない彫刻であるというところに対しては、やはり安心感というものがある、会場を見ましたけれども、森林浴をしているような気分にもなれるという感じがしました。私は審査主任の先生方のご苦労と同時に、明日を知ることが

できてよかったと思っております。昨日の授賞式の時に、とても若い方がいらつしやるなと思つたら、それが特選だったという話をお聞きすると、うれしいですね。好循環が生まれているというところに魅力をととも感じさせていただきました。

司会 先生、どうもありがとうございます。

それでは、事務局長の神戸先生から、前半を総括する形でお話をお願いいたします。

神戸事務局長 それぞれの科の事情を改めて今日お聞かせいただきまして、審査される先生方の苦労というのでしょうか、そういうものも感じました。

日展一五年の歴史の中で、古くからの作品を図録などでひもといてみますと、一科から五科まで



神戸 峰男

全てが随分と申しますか、大きく変化してきているような気がしています。それはなぜだろうかと考えることが、次の時代につながるっていくことではないかと思いました。日展の今を聞き座談会を重ねることによって、審査のありようというものを考えていけるよいきっかけになればと思います。ありがとうございます。

司会 何か後半につながっていくよいお話がたくさん出たように思います。

(休憩)

司会 後半は、「混迷の中で—日展への期待—」という大きなテーマでお話を伺うのですが、現在、コロナ禍、ウクライナ、自然災害等々があり、混迷していると言つてよいかと思ひます。その中で日展というのはどういう役割があるのか、今後どのような形で発展したらよいかなどお聞かせ下さい。

また、日展をどう認知していただくのかとか、意識をどう持っていたかとか、いろいろな視点があると思います。この未来への展望という中には、能動的なものと受動的なものと両方の側面が

あると思いますので、いろいろな側面からお話を願えばありがたいなと思っております。

それでは、まず理事長の宮田先生からお話をいただきたいと思ひます。

混迷の中でのあり方

宮田理事長 今、司会から「混迷」という言葉がございましたね。まさしく今、混迷まっただ中。世界情勢も日本の中の情勢においても、予期せぬというか、まさかと



講堂でのイベント

洋画会場



在を、皆さんの中で誇りを持ちながら進めていっただけなら、より存在価値というのは出てくるのではないでしょうか。

今、やはり国会の中でも議論されているということを私も漏れ聞いておりますが、大事な部分というのが僕らに課せられているのかなという感じがしております。

司会 今の宮田理事長のお話を受けて日本画の土屋先生、お願いいたします。

土屋 僕も子どものころからのことを思うと、やっぱり人見知りが強く、人とともに話ができない人間であつたわけですから、絵を描くという心の支えがあつたら、今こうやって少しまともに皆さんの前でお話しできる人間になつていと思うのですね。

最近、ちょっとおもしろかったのは、遺伝子の本の中で「バッハの曲がバッハの遺伝子の配列と一緒だった」ということが最近わかつてきたらしくて、今、若き音楽家は自分の遺伝子をダウンロードする流れができつつあるというような話を読みました。つい絵も教えがただけれども、みんな持つて生まれたものの、授かったものを持つっているわけです。遺伝子を励

ますというか、支えていくことの大切さを思いますね。

以前、ゴールドデングローブ賞で、映画音楽の大賞を取った「デイス・イズ・ミー」という曲があり、「デイス・イズ・ミー」、この言葉が結構印象深く、「これが私だから」ということは、何て大切な言葉だつたかなと思いますね。

日展も、そういう作家をいかにみんなで育て上げていくか、そういう意味では、さっきの彫刻の二一歳の方が初入選で特選、そういう人を選び出せたというのは、やはり成果ではないですか。

司会 二科の佐藤先生、いかがでしょう。

佐藤 私は現実的な問題として、洋画の出品者の多くは、六〇代から八〇代の方が主ですので、この世代が終わつたら、もう終わってしまうのではないかと不安がともあります。

私、今、七十八歳ですが、自分が生きていこうはいいだろうけれど、その後が本当に心配ですよ。

それで、例えば夏休みの「ワンデイアート」や会期中の「わくわくワークショップ」などのイベントでは、親子で参加して体験できる企画があります。日展会期中に、会場の一部で子どもたちの共同制

子どもたちの共同制作作品



作の作品や、イベント内容が分かる写真が飾ってありました。子どもたちが芸術に触れることは明るい気持ちにさせてくれます。

これからの日展を考えると、子どもや保護者への働きかけを五科そろって考えたいです。

また、先程、彫刻の方で、初入選で特選の話がでしたが、洋画でも一名いらつしゃいます。

司会 続きまして、三科、山田先生、お願いいたします。

山田 先ほど宮田先生から、今、ITの時代だけれども、感性の世界は芸術家に託されているという

いう環境の中にあるわけですし、そういう時ほど大事なのが心の問題ではないかと思っております。そして、ITがこれだけ進んでおりますと、頭脳は任せれば機械がやってくれる。そうなつてくると、感性と心の豊かさみたいなものは、もう芸術家に任されていると僕は思います。人間が生きていくうえで一番大事なことは、もちろん食糧事情もあるでしょうが、やはり心の豊かさになつてくると思えます。そうになった時に、この一一五年の歴史ある日展というものの存

ようなお話をいただきました。この会場、一科から五科まで拝見していますと、今世界で大きな問題になっているウクライナの戦争に対しての作家個人個人の不快さというか、抗議というか、そういうものを絵の中とか彫刻の中に秘めているものが結構見当たります。

他の部門でもありました。日展というのは公益法人ですので、こういうようなものも一つのテーマとして外に発表するということも取り入れていいのではないかとこの感じを私は受けました。展覧会をやっている以上、ただ発表するだけではなくて、社会にアピールするののも一つのテーマではないかなと感じました。

司会 続きまして、四科、春山先生、お願いいたします。

春山 二〇二〇年から続くコロ



春山 文典

ナ禍の中、この三年間のボディブローのように蓄積されたダメージというのは、回復するのに相当時間がかかるのではないかと感じます。そういうことが現実だということ、を考えていかなければいけないと思うのです。

工芸の場合、毎年新入選が三〇人いれば、一〇年で三〇〇人になりますね。それだけの方が増えてくるとこの計算になりますが、現実にはなかなかそうはいかない。一、二年は出しても、覚悟を持って続けるということがやはり難しいのかなという感じがしますね。

きらつと光るものを出し続けてもらうということしかないかなと、私は感じております。

司会 続きまして、五科、星先生、お願いいたします。

星 昨今とはにかく、字を書かなくなってきた。これが一番我々にとってはどうしたらいいものかなという気持ちがありますね。ただ、筆先の触感と脳のつながりというのは、まことに微妙なものがある、脳にもすごい刺激になりますね。そういうことを考えると、今、教育の現場では知的なものばかり追っかけていますけれども、その知を養う根源になる脳の働きというのが、多分そうい

う微妙な世界をやることによって、また一つの新しい展開が出てくるように思います。

宮田理事長の「森林浴」という名言がありましたけれども、何か肌から吸収するものが文化の一番大事などころなのかなというように私は思いますね。だから、余り理知的に物を判断するのではなくて、もともとと皮膚感覚で取り入れられるような、それぞれの科で最高のものを出していくということが、やはり日展の今後の存続にかかわってくるのではないかな



書会場

と私は思います。

司会 今の星先生のお話を受けて、どなたかご意見ございますでしょうか。

土屋 今、星先生の言われたことですが、とにかくいいものを見ると、身が引き締まって、ばらついていて自分がまとまるというのか、だから、日展に出すということが目的ではなくて、かつて日展に立派な先生がいらして、ああ、こういう先生のような絵を描きたいなとか、こういう先生についていきたいなということが、やっぱり入口にあったような気がするんですね。とにかくいい仕事をやるか、一人一人にかかっているとあります。

宮田理事長 日本はいいなと思う中の一に、日本の美しさがありますよね。人工的な美しさというの僕はあると思いますが、人工的でない自然の美しさもあります。また、心の美しさというのは日本人がDNAレベルで持っているものではないかなと思います。それをもっと引き出すためのきっかけづくり、ベースになるのが日展なのだという力強い意識観というのがあるということが大事ですね。

司会 他になにかございますで

でしょうか。

春山 巡回展が少な過ぎるのではないかなと思います。

開催地がいつも決まっているところですね。これは何とかできないものかなと、やはりまだ日展を知らない多くの人達に関心を持つてもらえるよう考えていききたいなと思います。

土屋 日展という先輩たちがつくってくれた、歴史豊かな日展を呼びたいという声があるような気がしますので、もう少し規模を小さくして、大きくない美術館でも



日本画会場

巡回できるような形もあるのかなと思います。

神戸事務局長 巡回展というのは、各地で開催されることにより、作家自身にも新しい発見があります。また地域の方たちに普段見ないものを自分たちの生活空間の中で観ていただく、そういう努力も我々はする必要がありますなと思います。

土屋 僕、子どもの時に絵はよく描いていたのですが、日展のあの一五〇号の大きいのを見た時に、子ども心に、こんな大きい絵が描けたらなとか、描きたいなという引力がやたら大きくて、それが今の僕につながっていることを思うと、小さい美術館での展示では日本画は少し点数を少なくしてもいいとか、それはみんなで相談することにして……

神戸事務局長 そういう考えも成り立ちますね。

司会 今回のテーマが少し大きくて、これをまとめるというのはなかなか難しいことなのですが、今後の日展の一つの方向とか、そういういたものに対する問題提起にはなったのではないかと感じました。

宮田理事長、何かございますでしょうか。

宮田理事長 この会議に出席させていただいたことが至福でありました。いかに先生方が日展というものの、それからご自身の専門分野のこと、包括的な問題をしっかりと考えるになり、熟慮された上で、お話をされているなということを感じて、出席させていただいたことに感謝しております。

山田 今回多くの外国の方がご来場になつているのを見かけます。その方々に対する対応というものも、一つ考えるべきではないかなと思います。

司会 ありがとうございます。先ほどの日展を広く知っていたかどうかというところにつながるお話だったと思います。

それでは、最後に全体のまとめを神戸先生、よろしくお願いいたします。

神戸事務局長 先ほどの先生方の話を聞いていて、日展が変わり目を迎えてきたかなということを感じました。

改組してから、来年一〇年を迎えますけれども、今までは組織を維持するために、「どうしたらいいか」、「どうあるべきか」、ということを考えてきて、それに尽きていたわけですが、これからは、どう広げていくかという、

その緊張感を皆さんで共有できてきたら、日展は大きく変わっていくのではないかなと思います。

更に、我々は今の立ち位置で自分を確かめていく、確かなものを探し求めていくという姿勢を日展の中につくり出していくということではなかるうかと思っています。

来年は一〇回展です。いろいろな企画がされているというような話も聞きますので、楽しみな記念展になるように、期待を持っていきたいと思います。

これで今日の座談会を終了させていただきます。ありがとうございます。ありがとうございました。

司会 今日は、長時間にわたって、先生方、ありがとうございます。



司会 西村 東軒

(おわり)

外部審査員より

日展日本画科の審査を終えて

(第一科日本画 外部審査員) 岡 泰正

中に入ってみてわかるということがある。制作者はもとより、審査する側も大変だという実感である。三日間、長丁場の実務に、ではなく、新しい表現とそれを生み出す才気を見落としてはいけないという使命感と責任を自覚しながら、初見の作品と向き合う緊張を保ち続けることになるからである。気疲れする。意欲的な入選作が、やがてスタンダードとなり、それが明日の日本美術を牽引していく。私の頭には一九世紀フランスのル・サロン審査の歴史が知識としてあって、ステレオタイプの美意識から常に自由であらねばと自身に言い聞かせていた。ほかの審査員も同様の意識であることを感じて、それまでの不明を恥じた。私自身、若々しく新しい感性の独創的な表現を見落とさないようにつとめた。若々しさは年齢ではなく、表現の新鮮さにほかならない。

審査は題名と作品だけの真剣勝負である。審査主任の土屋禮一氏は、「じっくり見ましよう」とくり返し言われ、結果を急がれなかった。そうして何度も膨大な公募作品を見るうちに、初見で目を引いた作品

が光彩を失い、地味に見えた作品が堅牢な細部と深い情感を発光させることに気づくという体験を持った。技量ばかりを追っていたわけではない。技量に裏うちされた新しい様式の発明と才能の発見につとめた。そのプロセスが、「じっくり」なのであった。同じく外部審査員の委嘱を受けた菊屋吉生氏が、そうした審査を「風通しがいい」とひとことで評された。



岡 泰正 (おか やすまさ)

一九五四年京都府生まれ。関西大学大学院博士課程前期課程修了。博士(文学)。神戸市立博物館設立準備室学芸員、同館展示企画部長。一九九二年第四回倫雅美術奨励賞、一九九四年第一回鹿島美術財団賞受賞。現在、神戸市立小磯記念美術館、神戸ゆかりの美術館館長。

日展第二科洋画の審査を終えて

(第二科洋画 外部審査員) 菅 章

外部審査員を今回初めて務めさせていただいた。一五七五点もの作品を一八人の審査員で五日間にわたり集中的に審査し、入選、特選を決め、さらに日を改め、顧問・理事・外部審査員で大臣賞、都知事賞、会員賞を選考した。

明治四〇年発足の文展を継承する日展第二科洋画は、日本のアカデミズムの正統として、形式やメチエにおける洋画のスタンダードを築き上げた。その歴史や伝統の重さを感じつつ、自らの絵画観と対峙、対決させて審査に臨んだ。案の定、筆者の基準と日展のそれは多少なりとも齟齬が生じ、作品の優劣とは何かという問いを突きつけられた。しかし、平成二六年の外部審査員制度導入後、日展に新たな胎動や変革が期待されているとすれば、現代美術を専らとする私の役割は、自らの絵画観、芸術観を全うし、ぶれることなく審査に向き合い、新たな風や変革の芽を見逃さないことだと腹をくくった。

そのような中、新聞で福田美蘭氏が練馬区立美術館の特別展「日本のマネ」展に出品中の作品を日展に応募し、選外となったことが報じられた。当時マネがこだわり続けたサロンの日展に見立て、敢えて挑戦したという福田氏の戦略的な試みであったが、日展に彼女の意図が届くことはなかった。筆者は審査後に練馬区立美術館で同特別展を見たが、もし審査前にその目論見を知っていたら、どのようなバイアスがかかっただろう。どちらに転んでも福田氏の術中に嵌るしかないのだが、作品を背景や文脈を抜きに評価することが難しいことを改めて思い知らされた。

逆説めくが、日展はもっとと権威を持つべきであろう。中途半端な改革よりも立ち向かうべき大いなる権威こそ、真の変革のエネルギーを呼び込む源泉となるに違いない。



菅 章 (すが あきら)

一九五三年大分県生まれ。東京造形大学造形学部美術学科卒業。鳴門教育大学大学院修了。大分市美術館館長、全国美術館会議理事、国際美術評論家連盟会員。著書に『美術鑑賞宣言』(共編著 日本文教出版)、『成田克彦「もの派」の残り火と絵画への希求』(共著 東京造形大学現代造形創造センター)、『美術館を語る』(共著 風人社)、『ネオ・ダダの逆説 反芸術と芸術』(みすず書房)ほか。

論評

(第三彫刻 外部審査員) 建 畠 哲

日展の彫刻部は塑造を中心としたオーソドックスな人体彫刻の軸線を堅持しているアカデミズムの牙城であるに違いない。その審査員に私のような外部からの眼を加えるという方針を取っているのは、審査の風通しを良くするためであろうが、多少なりとも新たな息吹をピツクアップする役割が期待されているのかもしれない。そんな思いを抱きながら審査に臨むことになった。

内閣総理大臣賞を受賞した中原篤徳のハ無垢の予兆Vは、その意味でも一つの収穫であった。ポリウムやマッス、ムーヴマンといった近代的な造形理念とは全く異なった人物像であって、仕草や表情からは明確なメッセージを読み取ることができない。だがそれはあいまいさにおもねたような造作ではなく、一種ニュートラルな雰囲気醸し出すニュアンスに、今という時代に身を置く若者の姿が、現実と将来に注がれた眼差しが、静かだが確かなリアリティーをもって感じられるのである。石膏の白一色の表面のディテールに工夫が凝らされ、衣装のラフな感触と顔や手足のリアルな表現とが潜在的な対比をなしている点も興味深い。

建 畠 哲 (たてはた あきら)



一九四七年京都府生まれ。早稲田大学文学部卒業。国立国際美術館館長、京都市立芸術大学学長などを経て、現在、多摩美術大学学長。

埼玉県立近代美術館館長。草間彌生美術館館長を兼任。全国美術館会議会長。美術評論家。詩人。詩集「余白のランナー」で歴程新鋭賞、詩集「零度の犬」で高見順賞、詩集「死後のレッスン」で萩原朔太郎賞、文化庁創立五〇周年記念表彰。

外部審査員雑感

(第四科工芸美術 外部審査員) 福 永 治

きわめて個人的な感想から始めるのは申し訳ないが、年に一度の日展を目指して制作された作品の優劣をつけることは、気の重い仕事である。しかも技法や表現に精通していない外部審査員の判断は、わずかな知識と作品から受ける印象に過ぎないこともあり、なおさらである。

今回の応募作品は六一一点、昨年から一点減ということで、まずは同じ数の作り手が地道に制作に励んでおられることを喜ぶたい。始まりの入選作品の決定は、公平、透明性を旨とし、繰り返し丁寧に行われたことを報告する。審査主任の春山文典理事が、その場その場で意見を聞き、慎重を極めて進行されたことが印象に残っている。選考は基本的には投票で、必要に応じて合議によって行われた。

第四科の特徴として、陶芸、染織、漆、金工、木竹工、革、ガラス、人形など技法が多岐にわたるため、時に分野を同じくする審査員が解説を務められることもあった。特選一〇点の選考においても、異なる分野の比較は難しかったが、それぞれ推薦理由の説明を受けた上で、立体、平面など、ある程度のバランスをとることで合意が得られた。一方、大臣賞、都知事賞、会員賞の選考は、第四科理事、顧問、外部審査員によって行われ、各人が二作品ずつ推薦の後に投票し、決定した。

私はこれで二度の審査を経験したが、日展が他と違うのは、十分に時間をかけ細かな表現にまで注意を払い、制作意図をくみ取るうとする姿勢に貫かれていることである。晴れの舞台に挑む作り手にとっては、これほど心強く、信頼に値する選考はないだろう。このような鑑審査を経て入選、あるいは受賞し、多くの人が目にするところとなり、それぞれ次のステップへとつながることを期待したい。



撮影：表恒匡

福 永 治 (ふくなが おさむ)

一九五五年広島県生まれ。上智大学文学部卒業。呉市立美術館学芸員、広島市現代美術館学芸員、佐、東京都現代美術館普及部長、国立新美術館設立準備室調査官、同館学芸課長・副館長を経て広島市現代美術館館長。現在、京都国立近代美術館館長、多摩美術大学客員教授。

書審査の感想

(第五科書 外部審査員) 名児耶 明

第九回の日展における第五科、書の外部審査員として参加、以前も感じたことであるが、連続して九日間、及ぶ審査のため、自分の日程確保が容易ではないことは苦痛であった。ほかの分野に比べ、出品数は八五七六ポイントという多さのため、審査日が増えるのは仕方のないことである。

書には、漢字、仮名、調和体、篆刻と大きく四部門があり、審査員全員で調和体と篆刻部門を審査するが、点数の多い漢字と仮名については、審査員が専門分野に分かれて実施することになる。それにもかかわらず、第一次、第二次審査あたりでは極めて短時間で入選に値するかどうかを判断しなければ、予定の時間で審査を終えることはできないのである。つまり長い審査期間を確保しても、入選作品を選び出すには時間が短すぎるといった印象を持たざるを得ないのも事実である。作品を次々と用意をして審査員の前に並べるスタッフの動きも、はじめに審査に参加した七年前に比べ、格段の進歩を感じられた。こうした努力の成果にも関わらず、一作品をじっくりと観ている時間が少ないのが、日展を目指して努力してきた出品者に対して申し訳ない気がしてしまふ。しかし、入選する作品の多くは一瞬で多くの審査員に訴える何かが見えるものであった。

今回、全体を通して漢字と仮名の入り混じった、通称調和体の作品に、以前より自由なスタイルの作品が少し増えてきたように思えた。今回の日展会員賞の仮名作品も見方によっては調和体とされるような自然な書のスタイルを感じさせるものであった。漢字、仮名を交えた書にも定評のあった古典を学んで、現代書の一つとして上手く完成させており、個人的には、こうした作品がより一般的になって日展に登場してくることをさらに期待したいと感じた次第である。



名児耶 明 (なごや あきら)

一九四九年北海道生まれ。
東京教育大学(現・筑波大学)教育学部芸術学科書専攻卒業。
大東急記念文庫を経て、五島美術館学芸員、同館学芸部長、常務理事、副館長(二〇一九まで)を務める。現在、東京学芸大学非常勤講師、東京藝術大学ゲスト講師。せたがや文化財団理事、独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会委員長、筆の里振興事業団理事・筆の里工房副館長、書文化・古筆研究者。

文化功労者

中井貞次

日本芸術院会員・日展顧問
現代工芸美術家協会常務理事



昭和七年一月四日京都府生まれ。昭和二十八年第九回日展初入選、同四十四年改組第一回日展特選・北斗賞、同五十二年第九回日展特選、平成二年第二十二回日展文部大臣賞、同五年日本芸術院賞、同二十年日本芸術院会員、同二十九年旭日中綬章。

第9回日展イベントレポート

※普及事業は、今年もガイドラインに沿って感染対策をして実施。少しずつ出来るが増えてきました。

『講演会・シンポジウム・映像による作品解説等』

今回も座席数を控えての開催となりましたが、毎回、満席になるほどたくさんの方が参加してくださいました。



『わくわくワークショップ』
二十一年目を迎えた『わくわくワークショップ』。

会期中、日曜日の三日間、午前・午後の全六回で、定員を超える応募をいただきました。指導作家が子供達の為に考えたプログラムを体験し、参加者は短時間ながら充実した時間を過ごせたようです。この様子はHPでご覧いただけます。



『手紙を書く!』

『わくわくワークショップ』の鑑賞カードから発展した、『手紙を書く!』では、三回目の今年も四三八通のお手紙をいただきました。



会場で交わすことが叶わなかった若い鑑賞者の感想や質問は、『手紙』になって、作家の元に届けられました。

※以下のイベントは中止いたしました。

『ミニ解説会』

『らくらく鑑賞会』

『触れる鑑賞』プロジェクト』

大臣賞受賞作品制作意図

東京都知事賞受賞作品制作意図

日展会員賞受賞作品制作意図

文部科学大臣賞

第一科（日本画）

長谷川喜久「緑韻に白く」



夫婦滝脇の岩場に立った時、重なり合う木々の枝が織りなすリズムと背景とのコントラストから、何か目には見えない静かな自然の優しさや造形の面白さを感じ取ることができたので、岩絵具の発色を最大限に活かしながらそれらを表現することに注力いたしました。

東京都知事賞

第一科（日本画）

能島 浜江「雨ニモ・・・」



宮沢賢治をテーマに描いております。雨ニモマケズは誰もが知っているとありますが、沢山の方の心中にあるこの言葉や「マケズ」をどのように描き表すのか、課題は沢山ありました。しかし思い返してみると、夢中で描き進め、描きあげたように思います。

日展会員賞

第一科（日本画）

大西 守博「愁」



目に見えるものを透して、見えないものをいかに表現するか。私の創作のテーマでもあります。学生である我が息子の姿を透して、不安、寂しさ、葛藤、諦め、ほんの少しの希望。人の持つ心の色をいかに表現足り得るか。日本画領域を模索しながら画面に向き合っているのですが、まだ……。

文部科学大臣賞

第二科（洋画）

大友 義博「瀬音」



アトリエ周辺の自然の素晴らしさを何とか作品にしたいと、水辺の風景の中に女性を配し、その表情や雰囲気により場の空気感を表現する、要素の多い構成に挑戦した。幾度も構成を考え直し修正しながらの制作となった。

東京都知事賞

第二科（洋画）

渡邊 裕公「時を超えて」



四年前に世界古地図を二十数枚手に入れた。コロンブスやマゼランが夢見た未知の世界のロマンを自分なりに表現したいとこの数年古地図と女性を組み合わせて制作してきた。大型キャンバスに描くため地名等が判別しづらく図書館等で克明に調べながら表現した。

日展会員賞

第二科（洋画）

田中 里奈「語らい」



ネット社会で人々の関係が希薄になりつつある世の中集い語らう時間を大切にしたいという思いを込めた。木版画は下図と摺り上がりが左右逆である。彫りや和紙への吸い込み具合など、バレンで摺って紙を持ち上げる最後まで失敗か成功かわからない。そこが木版画の醍醐味である。

内閣総理大臣賞

第三科（彫刻）

中原 篤徳「無垢の予兆」



普段、授業やゼミで接している学生や身近な人たち一人ひとりが今回の作品のモデルです。ある種の心象的な内容を具象彫刻に落とし込んでいくことに時間を費やしましたが、どこにもいない、しかし誰かかもしれない若者の姿が出来上がったように感じています。

内閣総理大臣賞

第四科（工芸美術）

山岸 大成「神々の座『天叢雲』」



人智の及ばぬ大いなる存在に対する畏敬の念を、穢れなき白の内に表現したく制作しました。古来より日本人は、天地から路傍の小石や草の内にまで、神の存在を認め祈りを捧げてきました。天叢雲の湧き出ずる所龍神現るの故事に倣い、磁器では至難な造形を試みました。

内閣総理大臣賞

第五科（書）

中村 伸夫「元好問詩句」



金の元好問の詩句を篆書体で書いた作品です。「我は夢む 天河の顰えりて 崩騰して雲雷を走らすを」と読みます。古代文字の構造的な特色を生かし、立体的な線の表出に努めました。また、文字のすべてを呼応させ、協和的な一場の舞台が構成できるように、全体の演出を図りました。

東京都知事賞

第三科（彫刻）

村山 哲「ヤマトオグナの御子」



「オグナ」から「タケル」の名前の由来となった熊襲成敗、更に蝦夷を討った英雄として語られているイメージですが、父親から疎んじられた彼の苦悩と孤独感と、罪の呵責を表現出来るように努めました。造形以前に、問題はどのように表現したら良いか？でかなり苦しみ悩みました。

東京都知事賞

第四科（工芸美術）

加藤 令吉「威―追憶の抄」



社会を震撼させ多くの尊い命を奪った邪悪に立ち向かう姿を形象化して制作した。暗く重いイメージの造形に鎮魂を込めての装飾を中心部分に配置し心象風景として構成、威嚇するが如くの二本の角と三足で立ち上がるフォルムのバランスに悩みながら完成をみた。

東京都知事賞

第五科（書）

綿引 滔天「風憐目」



甲骨文を用いてその図象性を強調するとともに、大小三字が作り出す空間を効果的に呼応させ、より明るく強い表現となるよう腐心した。「風」は鳳の羽の形を印象的に垂らして足元の空間を生かし、「憐」は心の形を下部に移して収まりよく、疎画の「目」は鋭く存在感を出してみた。

日展会員賞

第三科（彫刻）

伊庭 靖二「天平の月を想ふⅢ」



いつもモデルを前にして制作をしています。そのことで生まれる存在感や空気感を大切にしたいと考えているからだと思います。モデル（自然）の形によりかかってもなく、自分の形（概念）に固執するだけでもない。そのような中から新しい何かが生まれてくるのを密かに期待している自分があります。

日展会員賞

第四科（工芸美術）

内藤 英治「靄ジュラシックツリー」



数億年前から自生する世界最古の種子植物ジュラシックツリー。長く伸びた枝が大地に近づくほど弓なりに反り返り、自然と共に生き、抗して繁いできた時・歴史に思いを馳せています。雨の雫に時代を写し、光る姿と共に生きる力と内なる蠢きの面白さを、藍染濃淡で表現しました。

日展会員賞

第五科（書）

倉橋 奇艸「茶湯古事談」



千利休生誕五百年の年、「茶湯古事談」より、利休・古田織部の茶の湯の大成者二人が、風炉の灰に思いを寄せるくだりを書きました。素材に漢字が多く仮名との調和や、連綿を少なくしながらも流れが出せないかと書き込み、焼き物の色を思わせる紙を選び仕上げました。

第九回日展 新入選者寄稿 ―喜びと抱負―



(日本画) 松野 夏子

私は、「日常的な風景から非現実的な情景を表現する」ことを念頭に制作を行っています。今回の出品では、住宅の裏庭に存在する、日常的なモチーフを私なりに解釈して自由な色で表現しました。初めて挑んだ一五〇号という大きな画面の中に大きな課題点もたくさん見つかり、次の制作にいかしたいと思いました。

この度の入選を機に、一つ一つの挑戦を丁寧に、真摯に向き合おうと改めて実感しました。



(日本画) 原 邦子

「日展に出品してみたい」と思うようになったのは七十五歳になって、いつまで描けるのだろうかと考えた時です。家族の状況、自身の体力と気力を本気で考え、「今しかない!!」と想いは募り、技量も顧みず無謀にも挑戦しました。制作に二年かかりましたが、今回初めて日展に出品する事が出来て夢が叶いました。入選は望外のような喜びです。

導いてくださいました方々と支えてくれた友人、家族に感謝しています。



(日本画) 池谷 貴子

今回初めて日展への出品を決意し、描き始めましたが、今までで一番長い時間がかかってしまいました。毎日自分の拙さに落ち込みながらも、最後は何とかして描ききりたいという気持ちだけで、夢中で仕上げました。

そのような作品が入選できたことはとても大きな励みです。見る人に何かを訴える作品にすることはとても難しく感じますが、今後も描くということに真摯に向き合っていきたいと思っています。



(洋画) 山崎 昌子

家庭菜園に取り残された白菜に目が留まりました。枯れかけたように見える芯の中から若い緑色の葉が覗き、伸びた茎の先から黄色の花を咲かせる、その生命力と健気さに気づき私のモチーフに繋がってきました。

今回の日展入選のお知らせは大きな驚きと喜びをもたらしました。これは「好き」の一心で描き続けてきたことへの励ましと感謝し、これを機に自然の息吹や命をさらに自分のスタイルで表現できるよう意欲をもって励んでまいります。



(洋画) 柳田 也寿志

今回の入選作品の「追憶の森」は、何気ない風景の中に美しさを感じる時、記憶にある原風景を思い出し情感を得るところから、風景をそのまま描写するのではなく心象風景ととらえ「追憶」としました。

この日展入選を励みに、今後も描くことを通して普遍性を紡ぎ出すことを目標にした制作を止めることなく続けていきたいと思っています。



(洋画) 河野 富美子

この度は日展に入選でき、喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。今回入選した作品は、ここ数年テーマにしている人形をメインに、バラと組み合わせ描きました。

これからも感性を磨き、自分の心寄せるものを対象とし、それらと対峙しながら、表現を深めていきたいと思っています。

絵が描ける日常にすることに感謝し、励んで参ります。



(彫刻) 小石川 愛 可

大学で彫刻を始めてから、日展に出品することの一つの目標にして来ました。今回日展に出品し、初入選させて頂き、その目標を達成できたことを大変うれしく思います。

今回の作品は初めて制作した等身大の作品ですが、中々納得がいかず約一年半かけて完成させたものです。女性としての力強さをテーマに、人間の持つ野生としての身体の美しさを表現しました。

今回の結果に満足することなく、今後も自分なりの美しさを追求し制作に励んでいきたいと思っています。



(彫刻) 北島 武 裕

初入選にあたり、お世話になった方々に感謝申し上げます。第二の人生として、彫刻、彫塑を考え、六十代半ばより挑戦して五回目です。「踊る」は若々しい現代の女性の喜びをテーマに、内面、外面を、体の反り、手足の動きで表現してみました。しかし、諸先生方の作品に比べ、まだまだ表現力、技術力の未熟さを痛感しています。

今後はさらなる目標に向け精進していく所存です。



(彫刻) 伊賀上 裕 介

「美術は雑学、幅広く学び続けなければならない。」この教えを胸に制作にあたりました。絵画を学んだ経験から掌を、運動部にいた経験から脚をというふうに、これまでの学びや経験を活かし制作を進めました。すると、自分の作りたいものが見えてくるようでした。このような結果に至れたのは、これまでの恵まれたご縁によるものと感謝し、今後も精進してまいります。



(工芸美術) 藤 中 知 幸

漆芸を始めて二十五年余り、二十歳で職人の道に入り塗師屋として仕事をしてきました。

近年、もっと自分らしい作品を作りたいと考えていた時にご縁を頂き、この度、日展に初入選いたしました。知らせを聞いた家族や友人の喜ぶ姿がうれしく、また、諸先輩方のご助言に自分自身の視野の狭さ、客観性の重要さなど、たくさん気が付きがありました。これからも継続して出品していけるよう、精進したいと思っています。



(工芸美術) 太田 学

学生の時より一貫して、粘土で機械的なパーツを作り続けています。また、「侵蝕」をテーマに金属的な質感を出すために、粘土や材料、焼成温度などを、試行錯誤してきました。数年前まで様々な技法を取り入れ表現してきましたが、曖昧だった考えを一度見直し、初心に戻り「格好良い作品を楽しみながら作る」をコンセプトとし、陶芸の概念に囚われず、今後の作陶に繋げて行きたいと思っています。



(工芸美術) 伊 藤 加奈子

作陶歴二十七年、日展挑戦四回目。土と火の神はなかなか微笑んでくれず、今回もあきらめ気味でしたが、こんな私に入選の吉報が届きました。

私の作品は植物の成長をひねったラインで表現したものです。まだまだの作品ですが、この入選は今後の制作に大きな力をくれた気がしています。「もう少し、もう少し」という気持ちで思いの入った作品を作って行きたいと思っています。



この度一五年という歴史と伝統ある日展に思いがけなく初入選の栄となり、嬉しさが込み上げると同時に身の引き締まる思いで一杯です。篆刻の道は深遠で、常に古典と対峙する日々の連続です。今作も古典に立脚した品格のある作品を念頭に組み組みましたが、文字の配置や空間処理の難しさに苦心しました。今後も精進を重ね、日展に出品することが自分自身を磨く場として挑戦し続けて行きたいと思います。

(書) 清 俊 玲



誰もが認める最高峰の展覧会「日展」。私にとつて憧れであり目標でした。多くの芸術家が作品を発表している、その同じ空間に自分の作品が飾られた喜びをひしひしと感じております。今回の作品は、大字の仮名作品です。大胆な動きの中にも「品」が備わるよう、一心に紙面に向かいました。今後も古筆を拠り所にした個性的な作品が発表できるよう精進して参ります。

(書) 子 安 尊 喜



三度目の出品で初入選の吉報が届きました。念願が叶い大変嬉しく光栄に存じます。制作にあたり、墨量をしっかりと入れ、力強い筆勢を意識して取り組みました。熱心に御指導を頂いた先生方、共に切磋琢磨しあえる大学の仲間、支えてくれた家族に励まされ、作品制作に打ち込める事が出来ました。心から感謝しております。これからも更なる高みを目指し、精進して参ります。

(書) 今 福 紅 蘭



この度の初入選は、多くの方々への、感謝にたえません。六朝楷書を通じて、現代につながる表現を模索しております。書の魅力は墨の鮮やかなコントラスト、気迫のこもった線、余白の美しさにあり、今後も、書の輝きを体現できるように努めます。教職にありますが、授業を通して書のすばらしさを伝えていきたいです。今回の入選の感激を忘れずに精進をしてまいります。

(書) 山 下 修



定年退職を機に十数年ぶりに日展にチャレンジ、題材の詩の世界に思いを馳せ、一貫したリズムで書き切ることを目標に取り組みました。初心に帰る作品と向き合う中で、たくさん課題を再確認できたことは収穫でした。この度の初入選は驚き、喜びとともに自分にとつての書について改めて考える機会をもたらしてくれました。多くの方々への支えに感謝し、今後も多様な書表現を求めて挑戦する心を忘れずに努力していきたいと思ひます。

(書) 溝 掬 水



日展の会場では、まるで巨大な山容の連なりの中で、自分の立ち位置を見失うほどに圧倒されました。書の景色はまことに多彩で、峻烈なもの実感しました。私自身、せめて一定の形を成したいと念願していますが、なかなか思うようにはいきません。今回の作品も様々なご助言に応えることができたかどうか心許なく汗顔の至りです。素直に喜びたい一方で、「まだ、まだ」と叱咤激励が聞こえてくるようです。

(書) 田 上 雲 峰

第9回日展 入場者数（国立新美術館）

月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)	月 日	曜日	天 候	入場者数(人)
11/3	木・祝	晴	1,958	11/12	土	晴	3,647	11/21	月	雨のち晴	3,575
11/4	金	晴	3,785	11/13	日	晴のち雨	3,544	11/22	火		休館日
11/5	土	晴	2,731	11/14	月	晴	3,112	11/23	水・祝	雨	5,399
11/6	日	晴	2,550	11/15	火		休館日	11/24	木	晴	3,756
11/7	月	晴のち曇	1,981	11/16	水	晴	3,266	11/25	金	晴	3,745
11/8	火		休館日	11/17	木	晴	3,388	11/26	土	雨のち晴	5,247
11/9	水	晴	2,658	11/18	金	晴	3,464	11/27	日	晴	5,417
11/10	木	晴	2,504	11/19	土	晴	4,350	入場者数77,134名（平均3,506名） ※11/3は出陳者内覧会			
11/11	金	晴	2,817	11/20	日	曇のち雨	4,240				

第9回日展 応募点数及び陳列点数

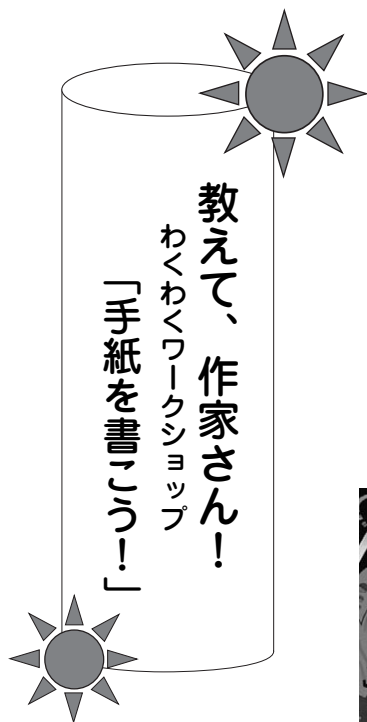
（新入選数は入選数に含む）

	日 本 画	洋 画	彫 刻	工芸美術	書	合 計
応 募 点 数 (前年度比)	339 (-12)	1,575 (-29)	85 (-3)	611 (-1)	8,576 (+58)	11,186 (+13)
入 選 点 数 (新入選数)	154 (13)	547 (58)	66 (11)	454 (22)	1,089 (193)	2,310 (297)
無鑑査点数	131	123	152	121	143	670
陳 列 点 数	285	670	218	575	1,232	2,980

第9回日展巡回展（予定）

会期は変更することがあります

開催順	開催地	会 期	会 場	開 催 者
	東 京	2022年11月4日～11月27日	国 立 新 美 術 館	公益社団法人 日 展
1	京 都	12月24日～2023年1月20日	京 都 市 京 セ ラ 美 術 館	日展京都展実行委員会
2	名古屋	2023年1月25日～2月12日	愛知県美術館ギャラリー	中 部 日 展 会
3	神 戸	2月18日～3月26日	神 戸 ゆ か り の 美 術 館 神 戸 フ ァ ッ シ ョ ン 美 術 館	神 戸 市 公益社団法人 日 展 神 戸 新 聞 社
4	富 山	4月21日～5月7日	富 山 県 民 会 館 美 術 館	北 日 本 新 聞 社



教えて、作家さん！
わくわくワークショップ
「手紙を書こう！」

「宙へ」という題名通り、宙へ椿のような花が飛んでいてすごく良いと思いました。一番良いと思ったところは、ただ花が宙へ飛んでいくのではなく、色や形、模様などで表現できているのも良いと思いました。この作品は日展の中でも一番お気に入りです。これからもこのような作品を展示して皆さんを感動させてください。

ゆなさん 8歳



宙へ

とてもうれしいお手紙でいっぱい元気をもらいました。ありがとうございます！椿はたくさんのツヤツヤした葉や根や土にささえられて生命をつないでいます。美しく咲く椿の花がいちばんうれしいひとときを作品にしました。これからも感動してもらえる作品づくりをがんばります。

堀内晴美

「わくわくワークショップ『手紙を書こう！』という、小・中・高校生から気にいった作品の感想や質問をあつめる企画を実施しました。3年目の今年、手紙は438通にも及びました。

すごくとめ、はね、はらい、形が上手でした。とくに陽、澁、紫、飛、奉、衣がすごく上手だなと思いました。質問です。一枚書くのにどのくらいかかりましたか。小さい頃から習字を習っていたのですか。私も習字を習っています。上達するコツを教えてください。

紗和子さん 10歳

私の作品を気に入ってくれて、本当にありがとう。とてもうれしいです。私は、小学校1年生の時から書道をならいはじめて、50年以上ずっとつづけています。今回の作品は、3ヶ月以上かかって仕上げました。50枚以上書いています。1枚には、45分くらい時間をかけて書いています。紗和子さんにも習字を習っているとの事ですが、先生のアドバイスをしっかり聞いて、何枚も何枚も自分になっとくいくまで書いてみましょう。書く時には、元気良く、思い切って書くと良いでしょう。がんばってね！

興水紫石

洛陽吹別風 龍門起斷煙
冬樹東生 澁紫凝華
天筆身野霜 上疲馬飛
蓬閒凭軒一雙淚 奉隨綠衣前

李賀詩



樹気

いろいろな色があって、おくゆきの木とかも右と左でじゃっかん色がちがうのもあって、この絵の森がげんじつと他の世界につながっているようで、右はくろくてどこにつながっているんだろうというイメージが出てくるし、左のところは黄色であかるいけど、木が少なく、少しさみしいというのがあって、いっそう似ていると思える作品でした。すごい作品でした。

龍惺さん9歳

私は京都の小学校で図工の先生をしています。龍惺さんと同じくらの年の人たちといっしょに図工をしています。

森のむこうにある世界まで、絵から感じてくれて、とてもうれしいです。地面も本当の色というより、土のあたたかみを感じるような色をくふうしました。

これからも絵やちょうこくなど多くの作品を見て、いろいろ好きなところをみつけてください。

学校で勉強とともに、図工もおおいにたのしんでください。

三輪 淳

片方は色が塗ってあり、もう一つは塗ってないのが良いなと思いました。発想がすごいなと思い、私も将来このようなことが出来たら良いとも思いました。

奈生さん9歳

モデルにしたネコは、2匹の兄妹のネコです。作り始めは、2つとも白いネコのように作るつもりでしたが、生命感を出そうと、思い切って色を塗り、白いネコも引き立たないかと考えた作品です。

是非、絵や彫刻など、もの作りの楽しさ、おもしろさを、感じてくれたら本当に嬉しいです。

ありがとうございました。

森 矢真人



時と刻

透明感がすごくてとてもきれいな作品でした！作品名にもある「ガラス」が表現されていてとてもきれいですごかったです。

中学校で絵画部に入っているのですが絵具で透明感が出せません。ぜひ教えていただきたいです。

萌花さん13歳



ガラスの詩

初めまして。萌花さんに少しでも参考になればと思います。ある時、何となく、ガラス器をじっと見つめていると、透明できれいなあ…光の当たり方によっていろいろ変化するなあと心を動かされました。その頃からガラス器を中心に絵を描きたくまりました。

絵画部では透明感を表現するために頑張っているらしいですね。例えば、紙コップとガラスコップとは、どこがどのように色の見え方に違いがあるのか？または、両方のコップにジュースを入れた場合は、どんな違いがあるのか？透明コップを通して見える色の発見によって透明感が表現できると思います。楽しく追求してみてくださいね。

永尾和子

●個人

青木晃子 様 東 晋一郎 様
新井演子 様 飯田真未 様
石崎國夫 様 井谷善恵 様
井上道守 様 今田功一 様
今村忠司 様 岩田 薫 様
奥田節子 様 角井 博 様
梶山純子 様 兼重勇希 様
菊池和久 様 草野曾舟 様
栗原直子 様 呉 祐輔 様
黒田浩平 様 児玉安司 様
近藤禎男 様 坂本美賀子 様
佐川かおる 様 澤井和行 様
高木寛史 様 田頭明子 様
田頭益美 様 高橋千笑 様
竹尾明子 様 竹本葉子 様
田中宏欣 様 土橋正彦 様
土屋礼央 様 寺岡宏高 様
寺田則昭 様 中原有三 様
中室里恵 様 西田俊通 様
西村潤帰 様 西村友子 様
野田裕一 様 藤田理恵子 様
藤本真之 様 堀 稲子 様
松原香織 様 宮島幸男 様
村里 暁 様 森嶋順子 様
吉見次郎 様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス 様
医療法人社団 永寿会 様
株式会社 大垣共立銀行 様
株式会社 玉蘭堂 様
謙慎書道会 様
ゴールデン文具 株式会社 様
株式会社 靖雅堂夏目美術店 様
公益社団法人 創玄書道会 様
株式会社 高山草月堂 様
株式会社 筑波銀行 様
T&T パートナーズ法律事務所 様
東洋額装 株式会社 様
株式会社 西文明堂 様
公益社団法人 日本書芸院 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様
一般財団法人 ビオトピア財団 様
福井素鳳堂 様
有限会社 丸栄堂 様
有限会社 みなせ筆本舗 様
一般財団法人 桃園学園 様
株式会社 谷中田美術 様
菱三印刷 株式会社 様
株式会社 リンクス 様

委員会委員補充

令和四年十一月三日開催の理事
会において、左記委員会委員が補
充された。

広報委員会

日本画 長谷川喜久

表紙

右上

内閣総理大臣賞

中原篤徳「無垢の予兆」

右下

文部科学大臣賞

大友義博「瀨音」

左上

内閣総理大臣賞

山岸大成

左中

文部科学大臣賞

長谷川喜久「緑韻に白く」

左下

内閣総理大臣賞

中村伸夫「元好問詩句」

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

鈴木 治平先生(工芸・賞) 4.10.1

小林 祥晃先生(工芸・賞) 4.10.30

梅原 清山先生(書・会員) 5.1.25

編集後記

コロナ禍による行動制限が緩和され、第九回日展は久しぶりに晴れ間の見えるような開催でした。勿論、万全の基本的感染防止対策を講じた上で行いました。

今回は第九回日展の特集として、外部審査員の先生方より、貴重な審査所感のご寄稿を頂きました。また、新入選の方々からも、喜びと抱負のお声をいただきありがとうございました。

座談会では、理事長、事務局長、各科の審査主任にご参加いただき、前半で鑑審査を中心に、搬入から陳列までの状況について例年との比較を交えた話があり、後半では若い作家の活躍による日展への期待や未来への展望について、大変有意義なご意見をいただきました。世界が閉塞し混沌とした状況の中、前向きで力強い思いが伝わって来ました。

第一〇回日展に向けて、希望をもって精進出来ますよう祈念いたします。(前原)

編集委員 川田 恭子 水野 収

清水 優 前原 喜好

堤 直美 野原 昌代

月岡 裕二 友定 聖雄

西村 東軒 福光 幽石